

令和6年度(2024年度)
印旛地区教育研究集会
情報教育 提案資料

<研究主題>

I C Tを活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
～教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指して～

1 研究主題

I C Tを活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
～教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指して～

2 主旨

(1) 学校及び生徒の実態

本校の生徒は、緑豊かな田園が広がり印旛沼からも近く、自然環境に恵まれた場所に位置する。佐倉市立臼井小学校と佐倉市立王子台小学校の2校の卒業生からなる。全校生徒259名、各学年3学級、特別支援が2学級の計11学級の中規模校である。「生きる力を育む～自分で考え、自分で決められる生徒の育成～」を学校教育目標としている。目指す生徒像は、「①自分で考え、自分で決められる生徒、②自ら学ぶ生徒、③周りと自分を大事にする生徒、④健康管理に努め、体力向上を目指す生徒」である。生徒は落ち着いており、明るい生徒が多い。地域とのつながりも深く、地域やP T Aの人たちと環境整備作業を行ったり、横断歩道を渡った時の生徒の振る舞いについて地域の方々からお褒めの電話をもらったりすることも多い。学習面では、落ち着いて授業に取り組んでいる。明るく活発で意欲的に授業に参加する生徒が多く、また学習が苦手な級友に対して手を差しのべることができる。I C T活用において、オクリンクを使用したりパワーポイントを活用したりなど、スムーズに使用できている。I C T機器を使うことが得意な生徒とそうでない生徒の使用感の差は感じられるが、生徒たち同士で自主的にI C T機器の使用のサポートを行っている。また、一部の生徒はタブレットを持ち帰ってオンライン学習に励むなどの勤勉さも見られる。

(2) 主題設定の理由と背景

本研究は、新学習指導要領（平成29年告示）解説社会編の②「社会科の改定の基本的な考え方」にある、「(ウ) 主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」を受けて設定している。この項目では次のような方針が示されている。

…政治に参加する権利を行使する良識ある主権者として、主体的に政治に参加することについての自覚を深めることなど、これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り開いていくことが強く求められている。

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新、少子高齢化の課題など、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、どのような未来を創っていくのかという目的を自ら考え、よりよい社会の創り手となるための力を身につけていくことを重視している。また、その力を身に着けるためには、社会的事象に興味・関心を持ち、社会に対する知識を持つことが求められる。そのため、現代社会における諸課題に触れ、興味・関心を持ち、社会的事象に対して当事者意識を持つことを目指す活動が必要となる。更に、その先に、諸課題を解決していこうとする、主権者としての責任を果たすための能力を身に着ける活動も必要であると考えられる。

そこで、本研究では、I C T機器を活用した授業を積極的に活用して生徒へ主体的で対話的

な深い学びを提供するための改善方法を探求していく。ICT機器を用いた授業を取り入れることで、より生徒の思考力を高め様々な教科でも養った思考力を発揮できるのではないかと。本研究ではICT機器を活用した授業実践の活用例からどのような思考力が身についたと考えられるのかを考察していくとともに、今後の授業改善をどのように改善していけば生徒によりよい主体的で対話的な深い学びを提供できるのかを模索するため本研究のテーマ設定に至った。

3 仮説

〔仮説1〕ICTを活用した授業実践を行うことで、生徒が主体的に授業に参加する機会を与えることが増加し、学習内容が定着しやすくなり、学力が向上される。

〔仮説2〕ICTを活用した振り返り活動を行うことで、生徒からの意見をより授業に反映できたり、形的评价の実践を行うことができたり、生徒の思考力の育成を促進する。

4 研究方法

仮説1、仮説2ともに各教科によってICTの活用方法は異なるが、大きく分けて3つの活用方法にわかれた。1つは、パワーポイントを用いての活用である。従来は印刷物を黒板等に貼り付けて授業展開を行っていたが、1クラスに1台程度のモニターが導入されたことで、画面に映し出しての授業展開を行うことができるようになった。これにより、同一の教具で何回でも確認することが容易になり、学習効果の向上が見込まれる。2つ目はみらいシードの活用である。みらいシードの「オクリンク」という機能や「ムーブノート」などの機能を使用することにより、生徒同士での情報交換が容易になったり、学習のまとめの部分で形的评价がしやすくなったりなど、生徒の意欲を伸ばしていくものであると見込まれる。また、生徒が書いたものが画面上で見ることができるようになったことで、苦手意識を持っている生徒にも参考になるものをその時に見ることができ、さらに生徒の思考力の向上が見込まれる。3つ目はマイクロソフトのアプリの活用である。主にFormsを用いたオンライン単元テストやアンケート機能を用いて、自身の習熟度を確認したり、振り返りを行うなどして、生徒により具体的なフィードバックを与えることができる。これにより、なぜ間違えたのか、次はどのように工夫しようかなど、自ら考える力を養うことができる。授業の振り返りでも全体に公開することでどのように授業を振り返ったらよいかわからない生徒へのお手本にもなる。よって、さらなる学力の向上が見込まれるとともに、生徒の思考力を促進させることでできると推察する。

5 実践事例

実際に授業にてICTを活用した事例をいくつか紹介する。教科は、英語と社会からは2つずつの事例、以降の教科、数学、理科、家庭科、技術、体育、美術、総合は1つずつの紹介となる。統一の報告レポートにてまとめ教員による資料作成を行った。レポートの項目として、単元名、学習課題、授業の概要、ICTを活用して良かった点や課題点を設けており、それぞれの項目に記述している。別紙の資料編を用いて1つ1つ紹介しながら実践事例を見ていく。

6 研究の成果と課題

〈仮説① 成果〉

ICTを活用した授業実践の効果として、画像として生徒に見せることで細かい作業も自分で進めることができるようになったり、口頭での確認ではなかなか難しかったことが、I

ICTを活用することで何度でも容易に確認することができ、より生徒の理解する力を養っていくことができた。主体的に活動する教科において生徒の自由な発想を集めることができた。資料編の英語①では、生徒自身が表現したいことを表現させることができた。また、活動の進捗状況を見ることができるので、困っている生徒へのアプローチも容易に行うことができた。このようにアウトプットさせる機会も作ることで、学習内容の定着をはかることができ、学力の向上にもつながったと推察できる。資料編の社会①および②では、学習課題と調べるテーマを提示し、調べてわかったことをまとめることを行った。資料編社会①を実際に授業した教諭のコメントに「各自が調べる際、ワークシートを利用するよりも自由度が高く、ただプリントに穴埋めをするだけの作業ではなく、自らが強く関心をもったことについて調べることができた。また、グループで伝え合う場面では、タブレットの画面を見せ合ったり、共有したりすることで円滑に話し合いが進んだ。さらに、インターネットがすぐそばにある環境であるために、出てきた疑問について即座に調べて解決していく様子も見られた。」との記載があった。あえてノートを使うという選択ではなく調べてわかったことをまとめ、オンラインで提出する手法をとることで、学習の自由度が増す。これにより自ら学び、学習意欲を向上させたことで、学力の向上にもつながったと推察できる。

〈仮説① 課題〉

生徒からの自由な発想を取り入れることができたり、自身で調べてまとめる力を養うなど従来の一方向授業と比較すると、生徒がより主体となって学ぶ環境が整ってきた。その反面どうしても準備面に時間がかかったり、授業時間の確保が困難になってきたりなど、限られた時数の中で授業を実施していくためにも学習提供方法に変化を見せていく必要が出てくる。また、ICTの使用に慣れている生徒とそうでない生徒での使用方法の差が大きく見られたのも課題である。資料編数学でも課題に挙がっているが、「日頃から積極的に活用することで操作にも慣れさせられると良いと思った。」のように日頃から生徒のICT活用の機会を増やしていく必要がある。

〈仮説② 成果〉

Formsを活用して振り返り活動を行う授業があったが、モニターにすべての振り返り内容を提示することで、形的评价を行うことができ、適切なフィードバックができるだけでなく、自己評価や振り返りが苦手と感じる生徒にとっても書き方の参考例を見ることができるので、苦手な生徒にとっても容易に言語化しやすくなるものとなった。また、振り返りの中で生徒からの「〇〇したい」という声をより拾いやすくなり、授業改善のきっかけにもなる。これにより、ICTを活用した振り返り活動は、形的评价も行いながら生徒の思考力を促進することができるだけでなく、生徒の意見も反映させることができ、今後の授業の改善にもつながっていくと考える。

〈仮説② 課題〉

オンラインでの振り返りの実施も生徒の思考力を促進することができるが、教師にとっては生徒全体の意見を集約できるが、生徒にとっては手元に残ってすぐ見れる状態ではないので、生徒自身で振り返るには不向きである。教師側で一括に確認しつつ、生徒も自身の振り返りをすぐ見れるような方法を模索していく必要がある。

7. おわりに

本研究では、「ICTを活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ～教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指して～」のテーマのもと、生徒がより良く学習し、どのように育成していくのがよいかを研究・考察を行った。ICTが導入され、授業内での使用が本格化されてから4年目となった。教師側もICT使用に慣れない中でも生徒たちがより良く学ぶために、ICTの活用を模索しながら授業の改善を行っていった。資料編でも教師側のコメントにもあったが、生徒が自分で活動できる機会が増えた。またモニターに映したり、自身のタブレットを見せ合いながら話し合い活動も行う場面が増えた。これらのことから主体的で対話的な学びの場は提供できている。その反面、ICTに結ぶ付けて授業を組み立てることもなかなか難しい單元もあるので、すべてではなく要所要所の活用が望ましい。今後もICTを活用していきながら生徒により深い学びを提供できるように授業研究を行っていく。